



### 今号の表紙

山本渉「光の葉」(2009) (ゼラチン・シルバー・プリント)

### 作者のことば

「植物のオーラをとらえることができる」というキルリアン写真による作品である。ただし、キルリアン写真として完成していない実験初期段階にできたものを作品として発表している。何とも呼べない未完成の写真を見ること。そこには「何かを見ている／見ようとしている」「何か生まれようとしている／生もうとしている」という目の経験、認識と想像力の戦いがある。この経験と戦いの持続に、「見る」ということの根源がある。

キルリアン写真は1930年代後半からドイツの電気技師のキルリアン夫妻が開発していたレンズを使用しない写真技法で、暗室内で被写体に接触させてフィルムを置き高周波放電発電機の電流を流すことでフィルムに被写体を介した電流が通電し、その部分が感光してネガ像が得られるという技法である。植物の葉が被写体に用いられ公式のテストにかけられたのは1940年とされている。依頼人はソビエトの植物専門家を名乗る男で、病気にかかった葉と健康な植物の葉の2枚を試させた結果、病気の葉からは微弱な像しか得られず健康な葉からはエネルギーの揺らぐようなすばらしい像が得られたという (P.トムプキンズ&C.バード『植物の神秘生活』、新井昭廣訳、工作舎、1987年、参照)。

キルリアン写真はUFOやUMA等のオカルトブームの際に日本にも紹介され一時は専用の撮影装置も販売されていたが現在では一部のオカルトマニアが知るのみとなっており、画像としても過去に撮影された葉から激しい光がたちのぼる完成度の高いものしか見ることができなかった。また最近になってカラーでキルリアン写真を制作している海外のアーティストの作品をみる機会があったが、演劇的でどこか植物のオーラとはかけ離れた表現に思えた。

私はキルリアン写真で植物のオーラが捉えられるとは全く考えていない。しかし1940年代に植物の生命力を見たいと願ったその熱意と狂気に植物への愛を感じ (ナチスドイツ占領下で開発された装置によってである!)、レンズを用いない写真技法に写真の源流を見た。そして是非ともその狂気を、オカルトや植物のオーラではない人間の植物への愛の営みとしてのキルリアン写真を、時間を超えて再生してみたいという気持ちにさせられたのだった。そのために私は、本来一定の条件を与えるはずの電場に私の力を加えてムラをだすことにした。

その方法とは身近な銅板などを用いて被写体とフィルムとを手で押しあてながら放電するというものだった。使用する植物はベランダで育てていたスマレ等で実験はキッチンを遮光した自宅暗室で行った。感光させたフィルムを何枚か現像し光にかざすと私の手の圧力によって画像が変化していることがわかった。それは単に植物のオーラとは呼べない私の筆圧によって描かれるスケッチのようであり、鉛筆は電流、紙は葉を挟んだ感光材という感じである。そうして暗闇の中で電気と葉とフィルムと手とを使って何度も同じことを繰り返すうちに、自分の中に可視化したい植物のイメージがあり、描かれまいとする植物そのものとの摩擦があることに気づいていった。ひたすらに作業を続けたい気持ちになっていたのは、被写体としての葉との摩擦を会話のように楽しんでいるからであった。おそらくキルリアン夫妻もこの感覚を味わっていたのだろう。暗闇のなかでいつの間にか私の身体はキルリアン夫妻と同化しその動作が時を越えて夫妻の感覚を呼び起こしていた。制作というよりも祭事に似た経験であったかも知れない。

時と身体をうつりゆき超えるものは霊と呼ばれている。記録でも記憶でもなくそうしたものを閉じ込めるために写真を続けている。あるいは続けさせられている。

山本 渉 Wataru Yamamoto

写真家 1986年生まれ。「自然」「自然をみること」「写真の自然」に関心があり、植物を主な被写体として「植物に見られていると感じる」ことや「植物の輪郭がはっきりせず、もやがかってみえる」という自身の感覚や意識を、個人的なイメージとして描くのではなく、「存在するもの」として写真で記録するための制作を続けている。

<http://adoledicta.nobody.jp/>